

マハル ――現人神の時代

遙か昔、神と悪魔がそれぞれ七名ずつ現人（うつしおみ）として生きる時代があった。

神々の名は、天界の大神（おおかみ）・ナガ、姫神（ひめがみ）・シルナ、彦神（ひこがみ）・ミギア、姫神・ヒタリア、彦神・イガツ、老神（ろうしん）・ゴソロス、小神（こがみ）・ハジヤ。彼らは天空に浮かぶ島の荘厳な神殿に住んでいた。

一方、地の底深く瘴気に満ちた闇に住まう悪魔は、冥府の大主（たいしゅ）・ガナ、魔女・ルツモ、魔神・フハガイ、淫魔・モルモ、鬼女（きじょ）・ダバ、魔王・ジグピキ、邪魔（じやま）・オールドグであった。

大神ナガは退屈していた。この何百年もの間、地上は相も変わらず愚かな人間どもで満ち溢れている。あのような者達に神の道や人の生きる道をいくら示しても無駄である。慈悲を垂ればつけ上がり、試練を与えればすぐさま神を呪う。おまけに神殿に住まう神々どもも、揃いも揃ってお人好しのつまらない奴らばかりだ。こんな奴らの上に君臨したところで何の価値もありはしない。天界を取り巻く薄ぼんやりとした光や生温い空気も耐え難い。怠くて怠くて欠伸が出る。ナガは神たる己の役割に心底うんざりしていた。

大主ガナもまた退屈しきっていた。地上の人間どもはあまりにも愚かすぎる。誑かして墮落させるのはいとも容易く、何の張り合いもありはしない。本当に人間というのは馬鹿者だ。人間も人間だが、地獄の悪魔どもは更に質が悪い。根性のねじ曲がったいけ好かない奴らが我が物顔でのさばり、いつ足下を掬われるか油断も隙もあったものではないのだ。おまけに奴らは不潔で汚らしい。地底のじめじめと湿った空気にも我慢がならない。薄暗くて、いつも悪臭に満ちていて息が詰まりそうである。もう黄泉の主なんぞやっつけられるか。

ついに溜まりかねたナガとガナは、小高い丘にやって来て面会し、相談を始めた。

「どうだろう、ガナ。一つ我々の役割を交換してみないか？」

大神ナガは厳かに語りかけた。

「つまり、俺様が神になって、貴様が悪魔になると言うのだな？」

大主ガナは傲然と顎を突き出している。

「その通り」

「よかろう。その話、乗ったぞ」

二人は顔き合い、それぞれの頭に被った冠を外して相手のものと取り替えた。悪魔の王冠を被ったナガは、涼しげな眼が見る見るうちに吊り上がって、口の両端が憎々しげに広がり、牙が鋭く尖って迫り出してきた。輝くような金髪も雪のように白かった肌も黒くなり、きな臭い雷雲を纏うような凄まじい雰囲気を漲らせ始めた。

同時に、ガナの方には全く逆の変身が起こっていた。針のようにツンツンとした髪は艶やかな栗色に変わり、岩のようにごつかった顔は端正で引き締まった表情を湛えて静まった。穏やかな中にも確固たる威厳が満ち、目映いばかりの後光が発せられていた。

「たった今から、貴様が大神ナガだ」

耳障りな掠れ声で、最前までは神であった者が宣言した。

「そして、君が大主ガナだ」

落ち着いた口調で元悪魔も応じた。

冥府へ降っていく大主ガナはわくわくと興奮に身震いしていた。なんとおどろどろしくも凄まじい雰囲気満ちていることだろう。ここが地獄なのだ。闇に蠢く子鬼どもが、ガナに恐れをなして蜘蛛の子を散らすように逃げていく。更に降っていくと、岩の居城にやって来た。そこが大主ガナの住処である。

「皆の者、集まれ！」

ガナは雷鳴のような号令を轟かせた。

「お呼びで」

地獄の悪魔どもがもぞもぞと姿を現した。

「オールドグはどこだ？」

ナガは目敏く一人足りないことに気付いて問い質した。

「へへへ……ここにおりまする」

黒い柱の陰から毛むくじゃらの悪魔が顔を覗かせた。

「こそこそするな、虚け者！」

怒号と共に、ナガはオールドグをこっぴどく打ち据えた。

「ひいいいっ！ お許しを……」

卑屈に蹲るオールドグは醜いことこの上もなかった。なおも脅すような形相をしながら、ガナは愉快で仕方がなかった。この一癖も二癖もありそうな奴ら。力の序列に従って神妙にしてはいるが、その実、忠誠心などかけらも持ち合わせていないのだ。こういう曲者どもを統率していくのは痛快そのものだ。

「大主ガナ、久し振りにモルモのおもてなしをお受け下さいませ」

淫魔のモルモはガナにそっと耳打ちした。

「あちらにとびきり美しい生娘を侍らせてございます」

——このガナまで誑かそうというのか、この淫魔は。

ガナはほくそ笑みつつモルモについて城の奥へと歩いていった。寝所の帳を捲って入ると、媚薬を含んだ香が焚き込められて、得も言われぬ淫靡な空気に包まれた寝床には一糸纏わぬ娘が三人、たおやかに寝そべっていた。ガナは、すぐさま娘の一人に飛びついた。

「あ……」

ガナの手がねっとりとううにつれて娘が喘ぐ。柔らかくて瑞々しい女の体に包まれながら、ガナは何故人間どもが淫欲に溺れるのか、その訳を体感していた。これでは病みつきになるのも無理はない。獣のような声を上げながら、ガナは思う様快樂を食った。

神殿へ向かう途中、大神ナガは深々と息を吸い込んだ。地獄の濁った空気に比べてなんと清々しいのであろうか。澄み渡った空、輝く太陽。世界は実に美しいと思った。

「お帰りなさいませ、大神ナガ」

神殿の大広間に、六人の神々が現れてナガを迎えた。

「うむ」

ナガは鷹揚に頷いた。

「恐れながら」

姫神シルナが遠慮がちに声をかけた。その慎ましさに、ナガは言いしれぬ感動を覚えた。

「貴方様は、誠に大神ナガであらせられますか？」

「いかにも。故あって少々様変わりしたが、私は紛れもなく大神ナガである。皆の者、日々の勤め、誠に大儀である」

「勿体のうございます」

神々は恭しく頭を下げた。実に高貴で美しい神々だとナガは感じ入った。

「時に諸君に頼みがある」

「何なりと仰せ下さいませ」

彦神ミギアが答えた。

「マハルという若者をご存じか？」

「マハルと申しますと……」

姫神ヒタリアは微かに眉を顰めた。
「“跳び蝮（はみ）”と呼ばれる悪党でございますな」
老神ゴソロスが呟いた。
「あのような鬼子を如何なさるおつもりでございますか？」
小神ハジヤが首を傾げた。
「あの者の側において、それとなく見張って戴きたいのだ」
「何故に……？」
彦神イガツが問うた。
「でき得ることならマハルを改心させたい。真つ当な人間にしてやりたいのだ」
「……………」
神々は沈黙した。
「神が直接人間と関わり合うなどとんでもないことで……」
老神ゴソロスは渋い表情を浮かべた。
「それはもとより承知。しかし、マハルは悪魔どもからも狙われている。彼奴等は人間離れした力を持つマハルに取り付いて、更に強力な悪の走狗にしようと企んでいるのだ」
「わかりました」
姫神シルナが決心したように言った。
「私が参りましょう」
「いや、姫神シルナ、それは……」
今度はナガが戸惑った。シルナは六人の中でも別格の女神である。軽々しく地上に姿を現すなどあるまじきことなのだ。
「そうです、シルナ。いけません」
ヒタリアも諫めた。
「荒っぽいことはこのイガツにお任せあれ」
巨軀の彦神が胸を叩いた。最初は渋っていた神々も、さすがにシルナにそう言われては腹を括るしかない。
「いいえ。是非とも私に」
シルナの口調はあくまできっぱりとしたものであった。
「もう行くと決めてしまいました。どなたもお止めにならないで下さいまし」
「ううむ……」
ナガは唸った。
「致し方ありませんな」
老神ゴソロスが溜息をついた。
「かくなる上は、我々が陰ながらシルナをお守りするしかないでしょう」
ミギアも言った。
「もう一度伺おう、シルナ。お気持ちを換えられるおつもりはないのかな？」
ナガは念を押した。
「はい、大神ナガ。我が儘をお許し下さいませ」
「わかった。ではお願いしよう」
ナガは諦めたように頷き、神々を見渡した。
「他の者は全力を挙げてシルナを守ってもらいたい」
「かしこまりました」

「と、“跳び蝮”だあっ！」

村の酒蔵が揺らいで、板葺きの屋根に大穴が開き、ぶち破られた板きれと共に、男が飛び出してきた。一抱えもある酒樽を担いでいるにもかかわらず、猿のように素早い跳躍を見せて、蔵の横手に生えている高木の太い枝に飛び移った。

「人間じゃねえ！ 天狗だっ！」

酒蔵の番人が叫んだ。野良仕事をしていた数人の村人達が、その騒ぎを聞いて駆けつけたが、男は意にも介さずに木から飛び降り、番人の胸の辺りを拳で殴りつけた。番人は凄

まじい勢いで後方へ弾き飛ばされた。間髪を入れずに男は他の村人達も薙ぎ倒してしまった。その間ずっと、酒樽は右肩の上に担いだままであった。ぴくりとも動かずに地べたに転がる哀れな村人達を後目に、男は鼻歌交じりに歩き出した。慌てる様子はないが、足取りは速かった。

白昼堂々どこへでも押し入っては盗み、邪魔だと感じれば躊躇いもなく人を殺す。それが「跳び蝮」と呼ばれて恐れられている男、マハルであった。だが、実際には彼はまだ若かった。十七歳になったばかりの少年である。まだ首筋の辺りに初々しさが残り、端正で綺麗な顔立ちをしているが、眼光はあくまで鋭く、態度はどこまでも傲岸でふてぶてしかった。既に稀代の悪党として国中に知れ渡っているのであった。

「跳び蝮」の「蝮（はみ）」とは、読んで字のごとくマムシである。即ち毒蛇のことであり、それが飛び跳ねるといふわけだ。常人では考えられないような腕力を振るい、尚かつ野生動物並に俊敏で、更には怪しい妖術まで使うというのだから、もはや人の範疇を越えて悪鬼羅刹の類に属する輩であると誰もが疑わなかった。

道すがらマハルは、通りかかった民家の娘を攫っていった。今宵の慰み者にするためである。当然の如く、刃向かった家族は残らず血祭りに上げた。

右肩に酒樽、左肩に娘を乗せて村のはずれまで来ると、木立の際に天幕が張られていて、側に数頭の驢馬が繋がれて足下の草を食んでいた。それが「幕家（まくや）のマハル」とも呼ばれる所以であり、彼は定住の住処を持たぬ放浪者であった。無論、押し込み強盗や婦女誘拐を生業としている者が一つ所に留まっていられるわけもなく、具合が悪くなれば天幕を畳んで驢馬に積み、さっさと退散するという生活を繰り返しているのであった。

マハルは井茶碗に満たした酒を乱暴に呷った。寢床に胡座をかいている彼の傍らには、家族を殺され己の貞操を汚された娘が力無く啜り泣いていた。

訳もなく苛々していた彼は、娘を思いきり足蹴にした。

「鬱陶しいわ！ てめえはもう用済みだ。どこへなりと消えて失せろ！」

娘は剥ぎ取られた衣服を抱えて天幕を飛び出した。

「おやおや、荒れてるねえ」

天幕のとば口に女が立っていた。

「何だ、貴様？」

繰り返し酒を呷るマハルの目は据わって血走っていた。

「どうやらあの小娘の味はさほどお気に召さなかったようだね」

女は音も立てずに歩み寄り、マハルの隣に腰を降ろした。

「あたしだったら天にも昇る心地にさせてあげられるけど……試してみる？」

女はマハルの背中を何とも言えぬ触り方で撫でた。既に悪酔いしかかっていたマハルはくらくらして突っ伏すように女の胸に顔を埋めた。もう何が何だかわからなくなってしまっていた。

それから彼は夢うつつのまま女と交わり、幾度も果てながら尚も激しい渴望に苛まれて益々盛んに目合をし続けた。いつしか東の空が白み始める頃を迎え、げっそりと虚脱した彼は女に絡め取られるようにして抱かれていた。

「なあんにも考えなくていいんだよ、マハル。人生面白可笑しく生きればいいんだ」

女は彼の頭を撫で付けながら囁いた。マハルの耳には届かなかった。眠りに落ちたと言うよりは気を失ったと言った方が正しかろう。女の乳房に涎を垂らしながらくぐもった舐めをかいている。

「このモルモがあんたをもっと凄惨な悪党に仕込んでやるから」

にとっ笑ったその顔は、紛れもなく淫魔モルモであった。

「うぐっ……」

不意にマハルは身じろぎして口を押さえた。そのまま天幕から転がり出るなり、げえげえと反吐を吐いた。

「大丈夫？」

背中をさすられたのはわかったが、戻したものが鼻に入ってしまう、涙と鼻汁と吐瀉物

にまみれてマハルはのたうち回った。

「もう、しっかりしなさいよ」

不意にその声があの子のものではないことに気が付いた。手の甲で鼻と口を拭いながら、マハルは顔を上げた。すると、そこに立っているのは全く別人の少女であった。ずきずき痛む頭を押さえながら天幕の中を覗くと誰もいなかった。

「お前、誰だ？」

マハルはまじまじと少女を見つめた。

「わたしはシヒナ。それより行水でもした方がいいわ」

少女はそう言ってマハルの手首を掴んで裏手に流れる小川まで引っ張っていった。すっかりだらしなくなっているマハルは抵抗できなかった。

「さあ。自分で洗えるでしょ？」

背中をとんと押されて、マハルは片足を水に浸けてみた。かなり冷たいが、耐えられないほどではない。寧ろ酒が抜けきらない体には心地よいくらいであった。小川が一番深い所でも彼の膝小僧の上くらいしかなく、マハルは背中を丸くしてざぶざぶと汚れた体を洗い始めた。瞬きもせず眺めている少女の無遠慮な視線が煩わしくて、彼は下腹部を突き出して見せた。

「よお、ここ洗ってくれ、ここ」

相手がようやく大人になり始めたばかりの年格好であることを承知でわざと卑猥なことを言ってみせたのである。少女を騙すことに何の後ろめたさも覚えない男であった。

「甘ったれないで自分で洗いなさい」

シヒナは全く動揺する様子もなくけろりとしている。

「ちえっ。ほんとにまだガキなんだな」

マハルは肩を聳やかして大事な所を洗い始めた。

「張り合いがねえったらありゃしねえぜ、全く……あいてて。ひりひりしやがる」

姦り過ぎだと後悔する股間に水の冷たさが沁みた。

「男の人の体って不思議ね」

少女は呟いた。

「あ？ おめえ見たことねえのか？」

「ええ」

「そいつはいいや。後でもっと不思議なもん見せてやっからよ」

マハルはげらげらと野卑な笑い方をした。

「あなた、そういうことしか考えられないの？」

シヒナは丸めた手拭いを投げつけた。

「当たり前だ。女と見りゃあ姦ることしか考えねえさ」

受け取った手拭いで機械的にごしごしと体を擦りながら、マハルは傲然と言い放った。

「食いたい時に食って、寝たい時に寝る。欲しいものはどんどん掻っ払う。邪魔する奴はぶち殺す」

「……………」

少女の目に涙が光った。それを見てもマハルはふんと鼻を鳴らすだけだった。

「悲しいけれど、それが人間の本音なのね……」

長い睫毛が伏せられると、涙は少女の頬を伝って落ちた。

『人間の』って、お前……別にみんながみんなってわけじゃねえだろ」

マハルは川から出て手拭いを堅く絞り、濡れた体を拭いた。

「俺みたいな悪党を覗けば、普通の連中は大抵善良で罪のねえ奴らばっかさ。くそ面白くもねえがな」

「そういう人たちを、もうこれ以上苦しめないでほしいの」

すたすたと天幕に向かって歩き出したマハルの後を追いつつシヒナは言った。

「わたしが側についている限り、これ以上あなたには絶対に罪を犯させないわ」

「なんだあ？」

マハルは目を丸くして振り返った。

「お前、付きまとう気か？」

「絶対に離れないわ」

少女の眼差しには固い決意が漲っていた。

「冗談じゃねえぜ。俺はどんなに佳い女だろうが、三、四回も姦りゃあすぐに飽きちまうんだ。ましてやてめえなんざガキじゃねえか。毛も生え揃わねえうちから一っちょ前の口利くんじゃねえ」

マハルは天幕の中に入ると素早く衣服を身に着け、寝床を片づけ始めた。

「手伝うわ」

畳もうとする掛布の端をシヒナが持った。

「触んじゃねえ！ 失せろ！」

マハルはぱっと右手を突き出した。ただ単に怪力なだけではない。彼には神通力の類があって、手や拳で打ち据えると、その相手は一瞬にして悶絶するか、運が悪ければ心臓が止まって死んでしまうのだ。その神通力を、いたいけな少女に対してさえいささかの手加減もなしに解き放ったのである。

ところが、ぽんっと気の抜けたような音がしただけで何も起こらなかった。シヒナは何事もなかったように掛布を取り上げ、要領よく一人で畳んでしまった。

「無駄よ」

少女はあっけらかんとして微笑んだ。

「“気”を操れるのはあなただけじゃないわ」

「お前……何者だ？」

半ば呆然とマハルは少女を見据えた。

「わたしはあなたの味方よ、マハル」

シヒナの美しい瞳には一点の曇りもなかった。

「たとえ全世界があなたの敵になったとしても、わたしだけは最後まであなたの側にいます。そのことを大神ナガの御名（みな）において誓います」

マハルの飼っている驢馬は三頭とも標準より大柄で、その分、人や荷物を載せるのが楽だった。マハルは三頭にそれぞれポロ、ロロ、ルルと名付けていた。のろまだが頑丈で粘り強いロロと逞しく馬力のあるルルに荷物を運ばせ、一番乗り心地の良いポロには自分が乗るようにしていた。

手綱を握るマハルは仏頂面で押し黙っていた。彼の腰帯に両手で捕まっているシヒナの体が時折背中に触れると、ますます洗面がひどくなる。

——とんだお荷物を背負い込んだぜ。

「何か言った？」

シヒナは朗らかな表情で声をかけた。

「おめえ、親兄弟は？」

「いないわ」

「じゃあ俺と一緒にだ。歳は？」

「あなたと三つしか違わないのよ。だからあんまり大人ぶらないでね」

そう言ってシヒナは笑った。

「けっ」

マハルは舌打ちした。

「……十四か。その割には乳が小せえな」

「そう？」

「ま、心配すんな。俺がしっかり揉んでやっからよ。そうすりゃすぐにでかくなる」

「別に心配なんてしてないわよ」

「へー、俺みたいな性悪のならず者と一緒にいても恐くねえってのか？」

「んー、そうねえ」

シヒナは小首を傾げた。

「今のあなたって、本当の自分じゃないわ。一刻も早く目を覚ましてくれないと、あなた自身がとっても危ないのよ」

「何言ってんだ、おめえ」

マハルは眉を顰めた。

「利いた風な口利きやがって」

だが、少女の言葉は妙に彼の心に引っ掛かった。

そこへ、馬に乗った男が二人、駆け寄ってきた。

「よお、大将」

口の周りと頬から顎にかけて髭むくじゃらの男が陽気に声をかけた。

「あ……大将、ついにカミさん貰ったのか」

相棒よりも若い男がシヒナを見て言った。

「何すっ惚けたこと言ってんだよ」

マハルは口元を歪めた。

「なあ大将、そろそろ懐が寂しいんで、一丁一仕事しねえか」

並んで馬を進めながら、髭の方が言った。

「駄目だよっ！」

シヒナが厳しく言い放った。

「もう二度と盗みも殺しもさせないからね！ よく覚えときな！」

「うへえ、おっかねえ御上さんだぜ」

若い方が大仰に肩を聳やかした。

「大将尻に敷かれんなよ、けけけけ」

「るせえっ！」

驢馬たちもびっくりするような大声でマハルは怒鳴った。どいつもこいつも痛に障る奴らだ。無闇やたらと気が荒れてならなかった。

「機嫌の悪い時にこのこ面あ出しやがって！ 今すぐ失せろ！」

「げっ。マジだぜ」

若い方がたじろいだ。

「ひとまず退散だ」

髭が馬に鞭をくれた。

「次はもうちょっと情けをかけてくれろよな、大将」

男達は去っていった。

「いつの間に機嫌が悪くなったの？」

シヒナが尋ねた。

「おめえに会ってからだ！」

マハルは驢馬を止めた。

「降りろ」

「いや」

少女は首を振った。

「降りろってんだ！」

「いやっ！」

シヒナは両腕でしがみついていた。

「このアマ！」

振り解こうともがくマハル。勢い余って二人とも驢馬の背中から転げ落ちてしまった。地べたに後頭部をしたたか打ち付けたマハルはふっと気が遠くなった。

「あ？」

いきなり山の頂に彼は立っていた。

「こ、こんなことあり得ねえ！ 一体どうなってやがんだ!？」

目の前に眩しい光が現れた。次第に光は人の形になっていった。

「私が誰だかわかるか、マハル？」

「まさか……神様か……？」

マハルは張り裂けんばかりに目を見開いていた。

「左様。私は地上の全てを司る、大神ナガである」

「そ、その神様が、悪党のオイラに一体何の用が……？」

身を強張らせながら、マハルはじりじりと後ずさりしようとしていた。

「お前がこれまでに繰り返してきた悪行は誠に許し難い」

大神ナガは重々しく言った。

「だが、神の慈悲は人に対して常に悔い改めの機会を用意している。後は人がその機会を捉えるか否かに全ては係っているのだ」

「お、俺は神様の前だからってお体裁を取り繕う気はさらさらねえ」

マハルの声は震えていた。

「罰したければ罰すればいい。地獄へ突き落としたいのなら、今すぐ真っ逆様に突き落とせ！」

「私はお前のことはよく知っている。確かにお前は悪党だが、決してただそれだけの人間ではない」

「いくら償っても俺の罪は消えやしねえ。だが、できることなら、こんな暮らしはもう止めたい。これ以上罪を犯さずに済むのなら、今すぐ死んでも構わねえ……！」

相手が何の隠し立てもできない神だと知ったせいか、生々しい思いが堰を切ったようにマハルの口をついて出てきた。

「そうだ。それがお前の、嘘偽りのない本心だ」

大神ナガは頷いた。

「だが、お前が己の所行を省みようとする度に、悪魔はお前の心を逸らし、一層悪の道へ突き進むように仕向けていったのだ。」

「今ならわかる……確かに俺は……心を操られていた……」

マハルは茫然と呟いた。

「悪魔がそれほどまでにお前に力を注いだのは、お前が特別な人間だったからだ」

輝く冠を頭に載せ、清らかな衣を身に纏った大神ナガの言葉は、穏やかでありながら力強かった。

「お前は両親のことを覚えているか、マハル？」

「お袋のことはぼんやりと……」

マハルは遠い目をして答えた。

「物心付くか付かないうちに死んでしまった。まだほんの餓鬼だった俺は、一人で生きてくために、どんなに酷えことだってしなけりゃならなかった……」

「父親のことは？」

「知らねえ。お袋も知らなかったんじゃないか」

「黄泉の大主、ガナがお前の父親だ」

「な、なんだって!？」

思いもかけないことを聞かされて、マハルは言葉を失った。

「お前の人並みはずれた体や神通力が何よりの証拠だ。普通の人間からは決して生まれ出ることはない。まさしくお前は鬼子なのだ」

「……………」

マハルの視線は宙を彷徨っている。

「だが、お前が残虐非道の悪事を働きながら、心のどこかで後ろめたさを覚えていたのは、お前の母親の心根をも受け継いでいたからだ。お前の母親……フユミナは……」

ナガの瞳が、一瞬の間に様々な色を浮かべた。

「とても美しい娘だった。汚れなき心の持ち主で、純真そのものだった……」

ナガはじっとマハルを見つめた。

「お前は面差しが母親によく似ている。特に目が……」

「俺は……これからどうすればよいのですか……？」

マハルの言葉遣いが次第に丁寧になってきた。

「まずは悪事を働くのを止めて真っ当な人間になれ」

大神ナガは威厳に満ちた口調で言った。

「どうやらそれは大丈夫そうで。なにしろシヒナっていう口うるさい小娘に付き纏われてまして」

マハルは苦笑いを浮かべた。

「次になすべきことは、いわば悪魔退治だ」

「へっ？」

「せっかく今まで手間暇かけて意のままに操ってきたお前が改心したとあっては、悪魔どもも黙ってはおるまい。必ずや再び冥府魔道に引き戻そうと迫ってくるだろう」

「……………」

マハルはごくりと唾を呑み込んだ。

「案ずるな、マハル。お前とて相当の強者ではないか。下っ端の小悪魔如きはお前の敵ではないし、より上位の悪魔が出てきた時には必ず我らが加勢をする」

「わかりました……」

ふっと吐息を漏らした後に、マハルは頷いた。

「俺……今までの罪滅ぼしに、頑張ってみます……」

「うむ。しっかりやるのだぞ、マハル。私はいつでもお前を見守っているからな」

「あ？」

シヒナの顔が目の前にあった。

「大丈夫？」

マハルが上体を起こすのを手伝ってくれる。

「あいてて……」

地べたに打ち付けた後頭部をさすりながら、マハルは辺りを見回した。驢馬のポロからシヒナ諸共転げ落ちた直後の状態に立ち戻っているようであった。三頭の驢馬たちも大人しく主人の側に佇んでいる。周りの世界とは全く関係なしに、自分だけが特殊な体験をしたのだとわかった。こんなことはシヒナに話したところで信じてはもらえまい。

「さてと、行くか」

マハルはそう言って立ち上がり、ぱたぱたと服を払った。

「お前、ついてくるつもりか？」

続いて立ち上がったシヒナを見やった。

「迷惑？」

少女は挑むような目で彼を見返した。

「まあな。つか、俺といると危ねえぞ」

「平気よ。わたしがあなたを守ってあげるから」

「けっ。よく言うぜ」

マハルはけらけらと笑った。これまで長年の間、常に胸の奥に居座っていた苛々がすっかり消えて、身も心も軽くなったように感じられた。

三日ほど移動した後に辿り着いたのは、初めて訪れる村であった。ヒマツと呼ばれるその村はかなり大きな集落で、多くの家が建ち並んでいる。人の往来も盛んで、田畑の作物もよく育っているように見受けられた。

「止まれ！」

馬に乗って武装した男が一人、マハルを制止した。

「この村には何しに？」

落ち着いた態度で男は尋ねた。

「仕事を探しに。できることならここいら辺に腰を据えたい」

驢馬に乗ったままマハルは答えた。

「何の仕事だ？」

男は瞬きもせずマハルを見つめている。

「人足でも野良仕事でも、体を使う仕事なら何でもいい」

「ふーん……」

男はマハルとシヒナを見比べて頭を掻いた。

「その娘は？」

「連れ合いよ」

シヒナが口を挟んだ。彼女の答えを聞いて、マハルはいささか呆気にとられたような面持ちになった。

「そう言えとこの男に命令されたのか？」

「何だと？ それはどういう意味だ？」

マハルは相手を睨んだ。

「攫ってきたんじゃないのか？」

男は悠揚迫らぬ素振りで口元を歪めた。

「あなた、お巡りさん？」

シヒナは物怖じせずに聞き返した。

「まあ、そんなところだ。警邏隊の隊長をしているメキラって者（モン）だ。商売柄、各人はすぐにわかるんだ」

「さすがだな。恐れ入った眼力だ」

マハルは薄笑いを浮かべた。

「確かに俺は臍に疵を持つお尋ね者だ。だが、お縄を頂戴するする気なんぞさらさらねえ」

「だめよ、マハル。揉め事は起こさないで」

シヒナは彼の肩をぎゅっと掴んだ。

「マハル？」

警邏隊長メキラの目がずっと窄まった。

「幕家のマハル……『跳び蝮』か？」

素早く腰の剣を抜いて身構えた。

「！」

バチッという音がして、メキラとその馬が怯んだ隙に、マハルは驢馬に鞭をくれた。手も触れずに相手に衝撃を与えるのは、『跳び蝮』の十八番の一つである。メキラの馬は怯えきった声で嘶き、後足立ちを繰り返しては駄々を捏ねて主人に手を焼かせた。ようやく馬を静めて辺りを見渡した時には、マハルの姿は影も形もなかった。

「ちっ」

舌打ちしながらメキラは剣を納めた。

ところが、あろうことかマハルは単身で警邏隊の屯所に乗り込んできた。

「まさかこんな所にまで俺の名が知られているとは思わなかったぜ」

「『跳び蝮』が自首とは……」

メキラは我が目を疑った。

「待てよ」

マハルは遮るように言った。

「俺が今までしてかした罪は全部よそでの話だ。ここの村とは何の関係もねえ。ここで騒ぎを起こさなけりゃ、おめえらだって文句はねえだろう。俺はもう二度と盗みも殺しもやらねえつもりだ。約束したっていい。これからは真人間になって真っ当な暮らしをするんだ」

「真人間だ？」

メキラはせせら笑った。

「無理だね、そいつは。貴様は骨の髄からの悪人だ。真っ当な暮らしなんて絶対にできっこねえ」

「信じて貰えねえのも無理はねえ。だったらこうしよう。今までの罪滅ぼしに何か人足の仕事を苦役代わりにただ働きでやるってのはどうだ？ 警邏隊の誰かを常に見張りとしてつけてもいいから」

「一体何を企んでるんだ？」

メキラの眼差しから、猜疑の色が消えることはなかった。

「考えているのはただ一つ。今までの極悪非道な稼業からきれいさっぱり足を洗うことだけだ」

マハルは真剣な表情で決然と言い放った。

「ううむ……」

メキラは思案顔で唸った。

「確かにおめえの言うことにも一理ある。この村で騒ぎを起こしさえしなげりゃあ、村人や部下を危険に晒してまでおめえを捕縛なんざしなくたっていいかもな」

「それが一番賢明だ」

「あ？」

マハルのふてぶてしい態度に、メキラは眉を吊り上げた。

「罪人が偉そうに言うな！」

唾を飛ばしながら隊長は声を張り上げた。

「このヒマツ村の治安は全て俺に任されてるんだ。貴様ごときにでかい口を叩かれる謂われはない！」

「村の平和を守れるか否かはあんたの判断一つにかかっているんだぜ、隊長さんよ」

マハルはじっとメキラを見据えた。

「……わかった。取り敢えずこの村で働くことを許可する」

メキラは溜息混じりに言った。

「だが、忘れるなよ」

彼の目が鋭く底光りした。

「どんなにしおらしくしてみせても、今までの罪は決して消えやしねえってことをな。そして、少しでも怪しい素振りを見せやがったら、ただちに牢屋にぶち込んでやる。刃向かったらぶっ殺す。よく覚えておけ」

「よかろう。取引成立だな」

マハルは静かに頷いた。その時、背後から声が聞こえてきた。

「なんなら俺が隊長さんの心配を取り除いてやろうか？」

屯所の出入り口に巨軀の男が立っていた。

「ナツマ」

メキラは男の方へ顔を向けた。

「俺がこいつの根性を叩き直してやる」

「ほう。うすらでかいのが威勢のいい大口を叩きやがって」

マハルはナツマと呼ばれた男を睨み付けた。

「少々腕っ節に自信があるからってつけ上がるんじゃないぞ」

「その台詞、そっくりそのままお前に返してやるぞ、幕家のマハル」

ナツマは悠然と見下ろしている。

「ほざけ！ 表へ出ろ！」

マハルは素早くにじり寄って大男を屯所の外に突き飛ばそうとした。しかし、不意に目の前から男が消え、マハルは出入り口から転がり出て地べたにしたたか尻餅をついた。何が起こったのかわからず茫然とするマハルの背後でナツマが笑った。

「俺は最強の戦士だ。誰も俺には敵わない」

特に気負う風でもなく、ナツマはさらりと言ったのけた。

「おのれ！」

すぐさま立ち上がってマハルは反撃を目論んだが、まるで勝負にならなかった。武術は言うまでもなく、超人的な神通力さえあっさりとは弾き返されてしまったのである。これほど完膚無きまでに敗北を喫したのは生まれて初めてであった。そのくせ、体にはかすり傷一つ負っていないとは。あまりの屈辱にマハルは青ざめて立ち上がることもすらできなかった。

「どうかな、隊長。こんな小童（こわっぱ）はいつでも成敗してくれる。だから、何も案ずることはない」

ナツマは何事もなかったかのように涼しい顔をして言った。

「さすがはナツマ」

メキラの表情がようやく少し緩んできた。

「いざという時には大船に乗ったつもりでお任せすることにしよう」

「どういふつもりだ、貴様っ!？」

マハルは嘔み付くように言った。ナツマがずかずかと天幕の中に入ってきて、ごろりと横になったからである。

「しばらく厄介になるぞ」

肘をついた右手に頭を載せて、ナツマは欠伸混じりに呟いた。

「ふざけるなっ！」

「ただで寝泊まりさせろとは言わぬ。お前をより強い戦士にしてやる」

「何だと？」

マハルの眉がぴくりと引きつった。先程ナツマに手もなく捻られたのが相当に応えている様子である。

「俺と同等か、あるいはもっと強い奴に挑まれたら、貴様あつという間にあの世行きだぞ、マハル」

ナツマの眼差しには静かな迫力が宿っていた。

「修行すればあんたに勝てるようになるのか？」

マハルは思わず問いかけた。

「それはわからんが、かなりいい線まで行くだろうな」

「……………」

腕組みしながらひとしきり思案したマハルは、隅の方で荷物の整理をしていたシヒナに尋ねた。

「どう思う、シヒナ？」

「えっ？」

不意に意見を求められて、シヒナは目を丸くして笑った。

「ナツマは立派な戦士よ。国中に知れ渡っているわ」

「俺は聞いたことがないがな、風の噂にさえも」

「確かに『跳び螻』のマハルほど有名ではないからな」

ナツマも笑った。

「いずれにしても、決めるのはあなた自身よ、マハル」

「別に反対はしねえわけだな？」

「ええ」

「そうか……………」

ふっと息を吐き出したマハルはナツマを見やった。

「勝手にしろ、全く……………近頃妙にお節介な奴が多いぜ」

早速翌日の早朝から修行が始まった。しばらく鍛錬し、同じくらいの時間休憩し、再び鍛錬…………という繰り返しで半日以上を過ごすのであった。ナツマがマハルに教えたのは、数種類の格闘技と神通力の扱い方で、マハルは飲み込みが早く、どんどん吸収して我がものとしていった。

数日経ったある日、マハルは休憩時間にヒマツ村のあちこちを散歩していた。すると、通りを慌ただしく行き交う人々の会話が聞こえてきた。

「盗人がフコボエを人質にとったそうだ」

「身代金が目当てってわけか」

マハルは野次馬に加わろうとしているらしい連中の後ろにくっついて歩いていった。そして、現場の様子を見渡した途端に洪面になった。商人のフコボエを捉えていたのは、こともあろうにゴシクイとタラグモであった。かつてマハルが極悪非道の限りを尽くしていた時に配下として使っていたならず者どもだ。舌打ちしながら、マハルは賊に対峙している警邏隊長メキラに言った。

「すまねえ、隊長。あいつらは俺の子分だ。俺が話をつける」

人並みをかき分けてマハルはゴシクイたちの前に歩み出た。

「た、大将！」

ゴシクイとタラグモは異口同音に叫んだ。

「そいつを放せ」

マハルは静かに命じた。

「な、なんでだよ、大将!？」

タラグモはうろたえた。

「俺はもう昔の稼業は止めた。もしてめえらがこれからも俺のことを『大将』と呼ぶつもりなら、今すぐに足を洗え。さもなきゃめえらを叩きのめしてこの隊長さんに引き渡す。

どっちにするか今すぐ決めろ」

マハルは一気にまくし立てた。顔を見合わせるゴシクイとタラグモ。

「おめえらは根っからの悪人じゃねえ。今からだって幾らでもやり直しが利くさ」

次いでマハルは苦笑いを浮かべた。

「実を言うと、俺も半ば拘束されてるんだ」

「へえ？」

「この隊長さんが常に目を光らせてるのさ」

「まさか……」

子分どもはすっかり意気阻喪していた。

「無論裁きは免れん」

メキラが後を引き継いで言った。

「しかし、この場で神妙に投降するなら一月程度の労役で赦免にしてやれると思う」

「……わかったよ、大将」

観念したようにゴシクイが言った。でっぴり太った商人のフコボエに突き付けていた匕首を、柄の方を向けてメキラに渡した。

「大将に捨てられたらおいら達行く当てがなくなっちゃうからな」

タラグモも掴んでいたフコボエの袖を放した。

「すまねえ、皆の衆、迷惑をかけて申し訳ない」

村人たちに対してマハルは頭を下げた。それを見てゴシクイとタラグモは口をあぐりと開けた。以前のマハルでは考えられないことだったからである。

村人たちはひそひそと言葉を交わしながら去っていった。彼が何者であるか、全ての村人が知っていた。そして、彼に対して誰一人として心を許してはいなかったのだ。

「こんなことで信用して貰えるとは思っちゃいねえさ」

マハルは自嘲気味に呟いた。

「自業自得ってやつだな」

部下に命じて二人を連行させながらメキラが言った。その声音には何の感情も込められてはいなかった。

「今日はこれまで」

ナツマが終了を宣言すると同時に、マハルはその場にへたり込んだ。何度も何度も打ち据えられて体中がたがたになっていた。ぺっと唾を吐くと血が混じっていた。

ふと見ると、道端に二人の幼子が立っていた。幼児特有の無遠慮さでまじまじとマハルのことを見つめている。

「どこの子だ、おめえら？」

マハルが声をかけると、子供たちはそろそろと近付いてきた。大人達と違って、「跳び蝮」などという渾名は知らないし、ただひたすら好奇心があるのみだった。

「名前何てんだ？」

マハルも子供が相手だと気楽だった。

「ハル」

兄とおぼしき男の子が甲高い声で答えた。

「ウナ」

妹らしい女の子は兄よりも更に甲高い声で舌足らずに言った。

「ハル！　ウナ！　早くおいで！」

母親らしい女が慌てて駆け寄って子供達を引っ張っていった。見送りながらマハルは子供達に手を振った。そして、ゆっくりと立ち上がり、夕暮れの空を見上げた。

夕餉の後片付けが終わったシヒナに、マハルはこっそり耳打ちした。

「な、シヒナ、ちょっと来てくれ……」

「？」

シヒナは食器をしまった木箱から離れ、天幕の外へ出た。

「なあに、マハル？」

「ちょっと……な……」

マハルは彼女の手を握って歩き出そうとした。

「どこへ行く？」

背後からナツマの声が聞こえてきた。顔を顰めながらマハルは振り返った。

「俺もお供していいかな？」

天幕のとぼ口で腕組みしながら、ナツマは厳つい面持ちで仁王立ちしている。

「いや、その必要はねえ」

マハルはぶっきらぼうに首を振った。

「のんびり横になって休んでくれ」

「是非とも連れて行って貰いたいものだな」

「断る」

マハルはシヒナの手を引っ張った。

「待てよ」

彼の手首を、ナツマはぐいと掴んだ。その怪力ぶりを己の体で毎日嫌と言うほど思い知らされているマハルはますます渋面になった。

「シヒナ、呼ぶまで中で待っていてくれ。すぐに話を付ける」

彼女が天幕の中に入るのを見計らって、マハルはナツマを少し離れた所へ引きずっていき、小声で叫んだ。

「おい、野暮な真似してくれるなよな！」

「いかん。絶対に許さん」

ナツマはそう言って口を引き結んだ。

「シヒナはなあ、メキラ隊長に対して自分のことを俺の連れ合いだって言ったんだぞ」

唾がかかるくらいに顔を近づけてマハルはまくし立てた。

「つまりだ、あいつはすっかりその気があるってこった。いかに師匠と言えども口を挟む筋合いのもんじゃねえんだよ。なっ？」

「お前は今修行中の身だ。女はしばらく控えなくてはならない」

ナツマはにこりともしなかった。

「冗談じゃねえぜ！　坊主の修行じゃあるめえし、なんで女断ちしなきゃなんねえんだよっ!？」

むきになって吠えるマハルの剣幕などナツマは意にも介さなかった。

「精を漏らすと命の力が落ちる。故に修行者は劣情に流されぬよう厳しく慎まねばならないのだ」

「なあ、頼むよ。殺生なこと言わないでくれよ」

マハルは泣きそうな顔になって懇願に転じたが、ナツマは頑として容赦しなかった。

「駄目だ。貴様の獣欲でシヒナを汚すことだけは断じて許さんと言っておるのだ」

「獣欲とは何だ！」

マハルは必死になって食い下がる。

「俺はシヒナに対してこれっぽっちも邪な気持ちなんかねえぞ！　本当だぞ！」

「本気で惚れてると言うのか？」

「……………」

ナツマの射るような視線にたじろいで、マハルは目を逸らした。

「お前の気持ちなんぞ関係ない。駄目だと言ったら駄目なのだ」

ナツマの動じざること岩の如しであった。

「どうしても思いを遂げたくば、この俺を殺してからにしろ」

「くっ……………！」

マハルは歯軋りした。さしもの「跳び螻」も、ナツマにだけは逆立ちしても勝てない。そのナツマが断じて阻止すると言えどもはや手も足も出なかった。ここは大人しく諦めるしかない。

悔しげに地面を蹴飛ばした後、くさくさしながらマハルは天幕の中へ入った。

「話は付いたの？」

朗らかな微笑みを湛えてシヒナは彼を見つめた。

「ああ……いや、もういいんだ……」

まだ十分には成熟しきらないが、なよやかで美しい彼女の姿を見ていると息苦しくて気が変になりそうだった。

「もう寝る」

マハルは寝床に潜り込んで掛布を頭まで被った。盗賊から足を洗う前は、欲望を我慢したことなど一度もなかった彼にとって、初めて体験する禁欲生活はまさに拷問そのものであった。抑えようと藻掻けば藻掻くほど闇雲に情欲が突き上げてくるのだ。今夜は眠れそうもなかった。

「いらっしやいませ！」

シヒナの元気な声が店中に響き渡った。しばらく前から彼女は村の飯屋で働くようになっていた。

「何になさいますか？」

席に座った老婆に茶を差し出しながら、シヒナは注文を聞いた。

「おやまあ、姫神シルナともあろうお方がかような小汚い店で……」

掠れた声で囁く老婆の眼光は異様に鋭かった。すると、隣の円卓に座っていた老人と子供がシヒナを庇うようにして老婆の前に立ちはだかった。

「ゴソロスとハジヤか」

老婆は冷笑を浮かべたかと思うと、瞬時に天井まで跳躍した。子供の首が吹っ飛び、卓の上に夥しい血がこぼれ落ちた。

「待て、ダバ！」

凄まじい勢いで店の外へ飛び出した老婆を、同じくらいの速さで老人は追いかけた。どさっと崩れ落ちた子供の首なしの軀に気付いて居合わせた客が悲鳴を上げた。

店の外では、老人と老婆が激しい戦いを繰り広げていた。最初は互角のように見えた。だが、次第に老人の方が劣勢に回っていった。怒濤の攻撃を受けながら、じりじりと後ずさっていく。

「イガツ！」

シヒナが叫んだ。どこからともなくナツマが現れるのと、老婆が老人に止めを刺したのは同時であった。

「おのれ、ダバ！」

ナツマは形相も凄まじく老婆に襲いかかった。老婆は口から火を噴いてナツマに浴びせかけたが、腕を一振りしただけで炎は横へ逸れて掻き消されてしまった。間髪を入れずにナツマの剛腕が老婆の頭を左右から挟みつけて掴み潰した。すると、老婆の首から下の体は黒煙を巻き起こして爆発し、欠片も残さず消滅した。

「大丈夫ですか、姫神シルナ」

気遣わしげな面持ちでナツマはシヒナを見やった。ナツマという男、実は彦神イガツが人間になりすました姿である。そして、老人と子供は老神ゴソロスと小神ハジヤ、老婆の方は鬼女のダバだった。

「ありがとう、イガツ。でも……」

シヒナの目から涙が溢れ出した。

「我々はゴソロスとハジヤを失いました」

「大きな痛手です。しかし、あなただけはこの命に代えてもお守り致します」

ナツマは唇をぎゅっと噛み締めた。

「マハルも狙われています。現にモルモが既に接近してきました。あの時は私の姿を見ただけで逃げ出しましたが……」

シヒナはそっと涙を拭った。

「今のマハルなら大丈夫です。モルモ如きには殺られはしません」

ナツマは自信たっぷりに言った。

「フハガイが出て来た時には私が相手をしますからご安心下さい」

「それにしても……」

シヒナは目を伏せた。

「大変なことになってしまいましたね。これ以上犠牲が出なければ良いのですが……」

「向こうが仕掛けてくる限り、戦いは避けられません。むしろこれからが正念場です」

ナツマの言葉に、シヒナの眼差しはますます悲しげに曇った。

またもや妄想の嵐に見舞われていた。体が熱くて息苦しくて、どうにもいたたまれない。ちらりと横を見る。真っ暗な天幕の中、中央にナツマが陣取り、その左側にシヒナが眠り、マハルは反対側の端に追いやられていた。

シヒナに手を出そうとすれば必ずナツマに妨害される。だからと言って自慰などしたくない。それはあくまで最後の手段であり、よほどのことがない限りはなるべく避けたかった。しかし、このままでは眠れない。寝不足では明日の修行に差し支える。

とにかく眠らなくては……。眠ろうとすればするほど、女の柔肌の感触が脳裏に甦ってくる。甘い匂い、瑞々しい秘部の潤い……。思うまいと念じる努力がことごとく裏切られて、次から次へと淫乱な妄念が渦巻いて五感を悩ませる。

何らかの方法で切り替えをしなくてはと思い、取り敢えず放尿することにした。そっと音を忍ばせて寝床から起き上がり天幕の外へ出た。調度良い季節であり、暑くもなければ寒くもない。少し離れた木立までゆっくりと歩いて行き、そこで用を足す。悶々たる思いも落ち着かない苛立ちも、減じこそすれ解消することはできない。溜息をついてその場から振り返ると、不意に女の姿が目に入ってびっくりした。

「だ、誰だ？」

闇夜に目を凝らすと、どうやら見覚えのある女だった。女は何も言わずに、マハルの胸に体を預けてきた。

「お前は確か……ハルとウナの母親だったな？」

どぎまぎしながらマハルは呟いた。熟れた女の色香でくらくらと眩暈がしそうであった。

「ハコナです」

マハルの胸に顔を押し付けた女はくぐもった声で名乗った。ハコナはヒマツ村で一番大きな畑を持つタラウの妻である。修行の途中、畑の側を通りかかった際に見かけるくらいで、言葉を交わしたことすらなかった。村人の多くが自分のことを快く思っていないと感じていたマハルは、自分の方から積極的に彼らと関わり合うことはしなかった。

「こんなことをしていいのか？」

努めて平静を装いながらマハルは言った。息が荒くなるのを必死で抑えている。

「亭主に愛想が尽きたのか？」

「だって……うちの人は、そりゃあいい人だけど、月並みで際立ったところなんて一つもありません。それに引き替えあんたは……」

ハコナは両腕でマハルの腰を抱き締めしがみついていた。

「あんたは只者（ただもん）じゃない。亭主が持っていないものを全部持ってる……！」

「俺のこと、嫌ってるのかと思ってたが……」

「ちょっと恐かっただけだよ。本当は凄く興味があったんだ。シヒナが羨ましくて羨ましくて仕方がなかったよ」

しかし、シヒナの名前を聞いた途端、マハルの心に歯止めがかかった。体の奥から突き

上げる、もやもやした衝動は消えてはいないが、この場でハコナを押し倒そうとする勢いに制動がかかってしまったのである。

——俺は、シヒナに惚れているのか……？

マハルは己の心に問うた。

「ねえ……あんた……」

ハコナが甘えた声で胸の膨らみや太腿をすり寄せてくる。マハルは十分にそそられていながら行動に移せなかった。せつかく女の方から求めてきているのに勿体ない話だった。自分でもそう思うが、どうにも踏ん切りが着かないのだ。

——やばい。

心の中を一言で表すとしたらそれしかなかった。

——何だかわからんが、とにかくやばい！

では、どうやってこの危機的状況をやり過ごせばいいのか？

——俺はもう、『跳び蝮』ではない……！

マハルの中に確固たる決意が生じた。

——毒に塗れて人々を傷つける生き方とはきっぱり訣別するのだ。

そうなると、この場も極力平和的な收拾以外の選択はなかった。

「俺は……あんたが思っているような男じゃない」

マハルは静かに言って、ハコナの体を引き離した。

「俺はあんたの亭主と比べたって、格別優れているわけではない。取り柄なんて何もないごく当たり前の男さ」

「そんなことないよ。あんたほどいい男は見たことない。……抱いて……あたしをめちゃめちゃにして……！」

ハコナは再びむしゃぶりついてきた。

——これ以上騒がれると、シヒナやナツマが目覚ます。

慌てたマハルは、ハコナの鳩尾に一発お見舞いした。敢え無く悶絶したハコナはその場に膝をついて倒れた。結局、当初の思惑に反して荒っぽい展開となってしまった。

——何が平和的解決だ、ならず者め……。

自嘲の苦い思いに口を歪めながら、マハルは気を失ったハコナを肩に担ぎ、タラウの家に向かった。力の強いマハルには、女一人運ぶくらい造作もなかった。眠っているであろうタラウたちに気付かれぬよう、母屋から離れた納屋に入る。藁の敷き詰められた土間にハコナを寝かせ、踵を返したマハルの顔面を痛烈な拳固が襲った。

「この野郎っ！ 俺の女房に何をした!？」

派手に転んだマハルを見下ろしているのは、農家の主人タラウであった。

「母ちゃん！」

息子のハルが横たわっているハコナに駆け寄った。

「かーちゃん！」

妹のウナが後に続く。

「あれ……？」

目を覚ましたハコナは、きょとんとして辺りを見渡した。

「あたし……どうしたんだろ……？」

「馬鹿野郎！ 目を覚ませ！」

タラウが怒鳴りつける。

「こいつに何をされたっ!？」

「えっ……？」

マハルを見たハコナの表情には、先日同様、忌避とか敬遠とかいう以外の色は浮かんでいなかった。先程の情熱的な求愛ぶりがまるで別人のようである。

「あたし、なんでここに……？」

マハルからなるべく距離を取ろうとして夫の方へ歩み寄りながら、ハコナは不安そうに口籠もった。

「何も覚えてないのか？」

不審の念に囚われてマハルが尋ねた。

「あんた……一体どうなってんの……？」

彼の問いには答えず、ただ夫の腕に縋って戸惑うハコナ。彼女の顔を見据えて観察してみたが、とぼけて芝居をしている様子はないと、マハルは判断した。

——本当に何も覚えていないとしたら、それは一体どういうことなのだ？

「出てけ！ 早く俺の家から出て行け！」

手に鎌を握り締めてタラウは叫んだ。稀代の極悪人と称される人物を前にして、怖じ気付きながら必死で気力を振り絞っている様が見て取れる。

「心配するな」

マハルは疑念を抱えたまま、納屋の出入り口に向かった。

「俺は何もしてねえからな。後で確かめてみりゃあわかるさ」

彼は妙な笑いを浮かべた。

「カミさんのことは責めるんじゃねえぞ」

そう言い残して、マハルは出て行った。

帰ってきたマハルを、ナツマは天幕の外で出迎えた。

「何があった？」

「いや、別に」

マハルは素っ気なく首を振った。

「隠すな。お前の身に起こっていることなら概ね予想がつく」

ナツマは真剣な眼差しで言った。

「……タラウの女房を知ってるか？」

やや躊躇いがちにマハルは話し始めた。

「ハコナだろう？」

「ああ。そのハコナがさっき俺の所へやって来たんだが……」

「何の用で？」

「……いきなり抱いてくれとせがまれた」

「……………」

ナツマは一層思慮深げな面持ちになった。

「当然俺は断ったさ。修行中の身だし、他人のカミさんじゃあまりにも相手が悪い。だが、ハコナの奴、やたらとしつこくてな。手を焼いた俺は当て身を食らわせて眠らせた。ところが、家で目を覚ましたハコナは何も覚えてないと言うんだ。どう思う、師匠？」

「うむ……考えられることはただ一つ」

ナツマは即座に答えた。

「ハコナが淫魔のモルモに操られたということだ」

「淫魔……？」

「お前も既に一度餌食にされた。一晩中交わってお前の精を搾り取った女がいただろう？ あれがモルモだ」

ナツマは苦み走った笑みを浮かべた。

「あれが……淫魔のモルモか……」

マハルは茫然と呟いたが、すぐに我に返ったようにナツマを見た。

「しかし、何であんたがそんなことを知っているんだ、師匠？」

「ナツマというのは、実は仮の名でな。私は天界に住まう七人の神のうちの一人、イガツなのだ」

「な、なんてこった！」

マハルは青くなって跪いた。

「今の今までとんだ御無礼を……！」

「よいのだ、マハル。これからも同じように接してくれて構わぬ」

ナツマ……彦神イガツは穏やかに言った。

「ただ、シヒナに対してだけは、行いに気をつけて貰いたい」

「するってえと……」

マハルは恐る恐るイガツを見上げた。

「左様。シヒナの正体は、大神ナガに次ぐ位の姫神シルナであらせられる」

彦神イガツの重々しい宣言に、マハルはがっくりとうなだれた。

「そうだったのか……。今にして思えば、ただの娘にしてはおかしなことを言う奴だと…

…いや、『奴』じゃなくて……」

「今後はくれぐれも淫らな思いを抱いてはならぬ。よいな、マハル」

「ええ、そりゃあもう……」

マハルは肩を落として溜息をついた。

「これからは性根を入れ替えて、せいぜい修行に身を入れることに致しまさあ」

「そうするがよい。現にお前は悪魔どもに狙われているのだからな。自分の身は自分で守らねばならない」

「すると、今後も奴らは襲ってくるか？」

固唾を呑むような表情でマハルは尋ねた。

「いかにも。悪魔どもはお前の類希な力を当てにしているのだ。手下に引き入れてこの世を更に恐ろしい生き地獄に変えようと目論んでいるのだ」

「ひええ……くわばらくわばら……」

マハルは少々芝居がかった調子で恐がって見せた。

「打ち明けてしまったのですか……」

不意にシヒナの声がした。ナツマとマハルは、天幕の外へ出てきた彼女の方へぱっと顔を向けた。

「はい、姫神シルナ」

イガツは恭しく会釈した。

「マハル……今まであなたを騙していました。……お詫びします」

少女の姿をした姫神シルナはどこか沈んだ面持ちでマハルを見つめた。

「滅相もないことで」

マハルは強張った顔でかしこまった。

「知らぬこととは言え、御無礼の数々、平に御容赦を」

「そんなことより、くれぐれも気を付けてくださいね、マハル。いよいよ悪魔たちは本格的に攻撃を仕掛け始めましたから」

「はあ……おいらのことはともかく、姫神さまはこんな物騒な所において大丈夫なんですかい？」

「昨日、店で襲われた。敵は私が倒したが、姫の守りに付いていた男神（おとこがみ）二人がやられた」

イガツが沈痛な面持ちで答えた。

「それじゃあ店なんかもう行っちゃいけませんぜ」

マハルも顔色を変えて言った。

「いや、それより神殿に戻られた方が……」

「いいえ」

シヒナは彼の言葉を遮った。

「わたしはここから出ていくつもりはありません。店へも働きに行きます」

「しかし……」

マハルは真剣に彼女の身を案じていた。

「私も賛成致しかねます」

イガツもマハルに同調した。

「大丈夫。わたしに関しては何の心配も要りません」

シヒナはにっこりと微笑んだ。

「無論、大神ナガに次ぐ位階にあらせられる姫神シルナに対抗し得る悪魔は大主のガナのみですし、ガナが罷り出て来ることはまずありますまい」

「わたしは争いを好みません。あくまで村の娘シヒナとして生活していきます。それがマハルにとって一番良いことだと考えるからです」

「おいらにとって……？」

魅せられたような眼差しでマハルは少女の姿をした女神を見上げた。

「だから……ほら、立って」

シヒナは外見通りの少女らしい仕草で、地べたに膝をついているマハルに手を差し伸べた。

「これからも今まで通り、何も遠慮しないで付き合って頂戴ね。いいわね、マハル」

口調も普段のシヒナに戻っていた。

「いやはや……」

遠慮がちに彼女の手を握りながら、マハルは立ち上がった。

「さあ、明日も早いんだからもう寝ましょう」

二人の男の背中をぼんと叩いて、朗らかに少女は笑った。

翌日からマハルは一人で修行する許可を得ていた。師匠のナツマ、即ち彦神のイガツからは既に一通りの教えを受けていたから、ずっとついてもらう必要はなかったし、何よりもイガツにはシヒナの護衛を頼みたかった。

早朝から山へ入って行ったのだが、何故かマハルは修行に身が入らなくなっていた。とりわけ、精神面の鍛錬に関して、ややもすると集中力を欠くことが多かった。

瞑想を始めても雑念を払うことができず、いつの間にかあらぬ考えに気を取られている。仕方がないので、ひたすら体を動かさず鍛錬に没頭するしかなかった。筋力や瞬発力を鍛え、格闘技の型を繰り返す。そうした訓練に打ち込んでいる間だけは雑念から解放されることができた。

だが、休憩し始めた途端に、またぞろ邪波動が湧いてくる。『邪波動』というのは、ただ単に人の道に反する“邪”な想念のことだけを指すのではないと、師のイガツに教えられた。即ち、人が目標に向かって進もうとするのを妨げる内的作用の全てを“邪波動”と称するのである。しかし、それは誰しものが心に思い描くものであり、何ら特別なものではない。『こんなことをして何になる？』『何の意味がある？』等々の疑念は全て邪波動の作用なのだ。その結果、無気力になったり、逆に怒りや苛立ちに囚われたりするのだ。そして、生命力を無駄に消耗していく。それが続くと、人間としての成長が止まってしまう。後は坂道を転げ落ちるように、せっかくの天与の才能もみすぼらしく萎んでいく。完全に道を踏み外す前に軌道修正を図らなくてはならない。己の心が進むべき方向からそれていないかどうか、常に確認を怠らないようにするのだ。そして、ズレに気付いたらすぐその場で直す。時々刻々変化していく心をいつでも監視していなくてはならない。それが最も難しい修行なのだ。

——とにかく、邪波動が生まれるのには必ず原因がある。まずはそれを突き止めなくては……。

マハルは地べたに大の字になって目を閉じた。全身の力を抜き、呼吸を楽にする。

——体の調子は？

——別に悪くない。重い所もなければ痛い所もない。

——では、何か気に入らないことがあるのか？

マハルは己の心を探って、本音を見極めようと意を凝らした。

——今ひとつ、かっとなえてくるものがない。何やら空しくて……。

——落胆している。気落ちしている。それで意欲が湧いてこないのだ。

——いつからだ？ 昨日はそんなことはなかったはずだが。

——何か変わったことが起きただろうか？

——タラウとハコナ……いや、あの夫婦のことではない。では、悪魔どもに狙われていると知ったせいかな？

——いや、俺は負けず嫌いだから、闘志をかき立てられこそすれ、気持ちが悪くなることなど考えられない。

——では……。

マハルはいよいよ核心に触れたのを感じたが、本能的に真っ向対決から逃げていた。そう、本来なら、落胆の原因などは、がっかりしたその時点で気付いてしかるべきだったの

だ。だが、こうなった以上はいつまでも本心から目を背けてはいられない。

——そうだ……。

——シヒナの正体が姫神シルナだと知ってしまったからだ……！

それしか考えられなかった。

——所詮色恋の対象になる相手ではないのだ。それがわかってしまったから俺は……。

——やはり俺は、シヒナに惚れちゃったのか……。

狂おしい想いが胸に突き上げてきて、マハルは身悶えするようにして上体を起こした。闇雲に駆け出すと、行く当てもなくただひたすら走り続けた。

どの辺りを歩いているのか、完全にわからなくなっていた。ヒマツ村からかなり離れてしまったようだが、引き返す気にもならない。空腹すら感じないほどげんやりしていた。何もかもがつまらなくて面白くなくて、そして、淋しかった。

脳裏に浮かんできたシヒナの面影を慌てて打ち消した。澄んだ瞳、さらさらの髪、明るい笑顔……。

——いや、いけない……。

耳に心地よい声、たおやかな仕草……。

マハルは激しく首を振って乱れきった心を静めようと足掻いた。何も考えずにいられたらどんなに楽だろう。澄み渡った空のような軽い境地でいられたら……。何とかしてこの苦しみから解放されたい。何とかして……。

——くそっ。酒が飲みてえ……。

だが、一銭も持ってなかった。

——掻っ払ってやろうか。

良からぬ考えが頭を過ぎった。実行に移すのを押し止めようとする力は全く働かなかった。マハルは辺りを窺った。

背後から数頭の馬の足音が接近してきた。

「よお、大将！」

声をかけてきたのは、かつてマハルの子分であったゴシクイだった。その後ろにはタラグモもいた。

「お前ら……」

マハルは覇気のない目で男達を見やった。

「牢破りをしてやったぜ、大将！」

タラグモが威勢良く叫んだ。

「ゾロメが手引きしてくれたのさ！」

「……………」

マハルは二人の後ろに位置した男を凝視した。

ゾロメ……思えば、マハルを悪の道に引きずり込んだ張本人とも言える男であった。まだ幼かったマハルに近付き、盗みの手伝いをさせたのを皮切りに、それ以降、ありとあらゆる極悪非道の手口を伝授して、「跳び螻」と呼ばれて恐れられるまでに育て上げたのである。

今にして思い起こすと、己の所行を省みようとする度にゾロメは姿を現し、迷う気持ちを巧妙にはぐらかされたような気がする。そして、マハルはどンドン人でなしの世界へとどっぷりと浸かっていったのであった。

無論、己の弱さに付け入られた自分が悪いことは百も承知である。しかし、ゾロメさえいなければ、全く別の人生になっていたことも、否定しようのない事実だ。

マハルは、己の愚かさを呪うと共に、ゾロメに対して激しい憎悪の念を抱いた。

「どうだ、マハル。久し振りに一発派手な仕事をやらかさねえか」

馬上から見下ろすゾロメの歪んだ顔がこれほど醜いと思ったことはなかった。がさつな声も耳障りで胸が悪くなる。

「お断りだ。金輪際貴様と手を組む気はない。消え失せろ！ 二度と俺の前にその汚（きたね）え面を見せるな！」

マハルは嫌悪を剥き出しにして罵った。

「何だよ、ひでえ挨拶だな」

ゾロメは薄笑いを浮かべて肩を聳やかした。

「餓鬼の頃からさんざ目をかけてやったのによお。とんだ恩知らずだぜ」

「黙れ！ もう二度と貴様如きに踊らされることはない！ 殺されたくなかったら今すぐ消えて失せろってんだ！」

「どうしたんだよ、大将？ そんなにムキになることねえだろう」

タラグモが怖々言った。怒った時のマハルがいかにも恐ろしいか知り尽くしているのだ。

「馬鹿野郎！ 目を覚ませと言っただろうが、二人とも！」

マハルは今度はゴシクイとタラグモを怒鳴りつけた。

「牢破りなんかしやがって！」

そこでマハルははっとなった。

「まさか……番人を殺しちゃいねえだろうな？」

「番人どころか、警邏隊長のメキラも血祭りに上げてやったぜ」

ゾロメが答えて高笑いをした。

「貴様……」

マハルは歯軋りした。憎しみのあまり、体が震えてくるほどであった。

「絶対に許さん！」

マハルは吠えながら、ゾロメに飛び掛かった。丹田（はら）に溜めた気の全てを叩き付けた。

「がっ」

しかし、あっさりと弾き返された気は逆にマハルを跳ね飛ばし、衣服のあちこちを引き裂いてしまった。

「くそっ……！」

すかさず起き上がったマハルのこめかみから血が流れ落ちた。

「殺れ」

ゾロメが顎をしゃくると、ゴシクイとタラグモが馬で突進してきた。

「血迷ったか、てめえら!？」

マハルは大きく飛び退いた。見ると、ゴシクイとタラグモは異様な目付きに変わっていた。明らかに正気ではなかった。

「てめえら、操られているのか!？」

マハルは総毛立った。気の返し技と言ひ、操心術と言ひ、人間業ではない。

——こいつはまるで悪魔だ。

「その通り！」

ゾロメはマハルの心の呟きに答えた。

「俺様の本当の名はオールドグ！ 悪魔七人衆の一人だ！」

見る見るうちに悪魔の正体を現したオールドグは、毛むくじゃらの黒い体にギラギラと真っ赤な目が毒々しく光を放っていた。

「そうさ！ 俺は餓鬼の頃から付きまとって、お前さんをせっせと洗脳していたんだよ、マハル！ 全くもってお前さんは素直で聞き分けのいい子だったもんさ！」

オールドグは反っくり返って嘲笑を撒き散らした。

「それぞれっ！ 野郎ども、かかれっ！」

オールドグは更に男達を睨つけた。二人は馬の蹄でマハルを踏み潰そうと襲い掛かってくる。操られているだけだとわかった以上、二人を殺すわけにもいかず、マハルは焦った。その隙を狙って、オールドグは口から炎を吹き出してマハルに浴びせかけた。燃え上がった衣服の火を消そうと地べたに転がったマハル目掛けて、ゴシクイとタラグモの馬が突っ込んできた。強烈な蹄の打撃を受けて、マハルは気を失った。骨が折れたらしく、左脚が異様な方向に曲がっていた。

何度も馬に踏まれてぼろぼろになったマハルをひょいと馬の背に載せて、オールドグは叫んだ。

「行くぞ、野郎ども！ 俺について来い！」

その姿は一瞬にしてマハルに変わっていた。本物のマハルを後ろに載せたまま、馬に一鞭くると矢のように走り出した。

マハルがオールドグに敢え無く敗北を喫していた頃、魔神フハガイは、彦神ミギアと姫神ヒタリアを襲撃していた。ミギアとヒタリアは双子の兄妹・アキミとリタヒとして、数日前からヒマツ村のとある貸し家に住み着いていた。

己の力に絶大な自信を持つフハガイは、堂々と表口から突入していった。

「相変わらず二人一緒か。仲のいいこった」

フハガイは残忍な笑いを浮かべながら、おもむろにミギアの両腕を掴んだ。

「ぎゃあああああっ!!」

ミギアの端整な顔が苦痛に歪み、両腕とも肩口からもぎ取られてしまった。

「ははははははっ！ 弱いな！ 貴様、それでも神か！」

フハガイは更にミギアの両脚をちぎって放り投げた。部屋中が血だらけになった。そして、フハガイは腰に携えた剣を引き抜き、ミギアの胴体を貫いて家の柱に繋ぎ止めた。

「よく見ているがいい、ミギア。お前の大事なヒタリアを思う存分可愛がってやる。お前の代わりにな」

フハガイがヒタリアの方へ向き直った時、彼女は既に魔神の術中に陥って身動きが取れなくなっていた。フハガイが一喝すると、衣服が吹き飛び、白い素肌が余すところなく露わになった。

それからたっぷり時間をかけ、フハガイは抵抗できぬ姫神を犯し続けた。

「ぐははは！ どうだ、ミギア!? よい眺めだろうが！ がはははははっ！」

激しく腰を動かしながら、フハガイは喜悦の雄叫びを上げた。手足をもがれ、柱に磔にされたミギアは声もなく涙を流した。

「おおおおおおっ!!」

獐猛なよがり声を放つフハガイに組み敷かれたヒタリアは、可憐な花が萎れていくように急速に衰えて痩せ細っていき、最後は骨と皮だけの無惨な姿になって枯れ果てた。フハガイが巨根を引き抜くと、骸はぼろぼろと跡形もなく崩れ去った。

「馳走になったな！ こいつはほんの御礼だっ！」

フハガイの拳がミギアの体を左右真っ二つに叩き割った。

「力が漲るぞ！ これならイガツにも負けはせぬ！」

フハガイは牙を剥き出しにして笑いながら、柱に刺さった剣を引き抜いた。

マハルに化けたオールドグは、ゴシクイとタラグモを引き連れて再びヒマツ村を襲撃していた。金品を略奪しては家々に火を放ち、何人もの村人を殺した。そして、襲い掛かった時と同じような唐突さで、賊は嵐の如く立ち去った。

一山越えた辺りで、オールドグはゾロメの姿に戻った。馬の背に積んだ略奪品とマハルを放り投げると、指をパチリと鳴らした。途端にゴシクイとタラグモは馬から転げ落ちて正気に戻った。

「いいか、馬鹿者どもめ」

ゾロメは馬上から言い放った。

「所詮、貴様らは骨の髄まで盗人なのだ。足を洗うなんてできやしねえし、誰も貴様らを真っ当な人間だなどとは認めはしねえんだ。だから、早くそのことに気付いて、己の分というものを弁えろ。人生なんて面白おかしく生きなきゃ損だぜ」

そして、ゾロメは嘲笑と共に去っていった。

「確かに……そうかもな……」

意識を取り戻したマハルがぼつりと呟いた。

「た、大将！」

ゴシクイとタラグモは彼の傍らに駆け寄った。

「大丈夫かい、大将？」

「俺を……シヒナの所へ連れて行ってくれ……」

「合点だ」

ゴシクイが横たわっているマハルを抱え上げて、馬の背に座らせた。体中傷だらけのマハルは呻き声を上げた。

「それから……その荷物をできるだけ積んで……みんなに返すんだ」

「何だ、これ？」

タラグモが足下に散らばっている品々を見渡した。

「俺たちが奪ったのさ……」

マハルは苦痛とも口惜しさともつかぬ表情で口元を歪めた。

「えっ？ 俺たちが……？」

「全然覚えてねえ……」

茫然とするゴシクイとタラグモ。

「ゾロメの野郎に誑かされたのさ。いいか、てめえら、二度と奴の側へ近寄るんじゃねえぞ」

「ゾロメとはもう組まねえってことですかい？」

「そうだ。奴らとは完全に手を切る。金輪際盗みも殺しもしねえ……」

マハルは折れた左脚を押さえて歯軋りした。

「しかしよお……」

略奪品を回収しながら、ゴシクイはぶつぶつ言い始めた。

「盗人稼業から足を洗うだなんて言い出してから、大将ちとしよぼくなっちまったんじゃねえのか」

「しよぼく……？」

マハルは馬の首に頭を凭せかけながら力無く呟いた。

「以前の大將はほんとにスカッとしててよお、滅法カッコ良かったのに。今じゃ見る影もなくなっちまってよお」

「兄貴、そりゃあ言い過ぎってもんだぜ……」

タラグモが恐る恐る口を挟んだ。

「やかましい！」

ゴシクイは喚いた。

「大体、大將がしっかりしてりゃあよお、俺たちがこんな体たらくにならずに済んだんだろうが！」

「俺に愛想が尽きたか？」

「だってそうだろうが！ 今のあんたの姿見たらみんな大笑いするに決まってる！ “跳び蝮、もすっかりヤキが回っちまったってな！”

「すまなかったな、お前らにまで惨めな思いさせちまって……」

「いや、大將、そんな……」

タラグモはマハルを宥めてから、ゴシクイを睨んだ。

「兄貴、それ以上言っちゃあいけねえ。大將だって好き好んでこんなしみつたれた状況に甘んじてる訳じゃねえ。それくらい兄貴だってわかってんだろうが」

「だってよお！」

ゴシクイは手にしていた皮袋を地べたに叩き付けた。

「何にもいいことねえじゃねえかよ……これじゃあゴミ以下だぜ……」

とうとうゴシクイは泣き出した。

「仕方ねえよ。生まれた時からおいらたちはみそっかすだったんだ。もっとマシな境遇に生まれついてりゃあ、ここまで落ちることはなかったさ」

抑揚に乏しい低い声でタラグモはぶっきらぼうに言った。

「だけど、俺は大將についてくぜ。他に行くとこなんかねえしよ。あんたはどうすんだ、兄貴？」

「うるせえ……」

しゃくり上げながらゴシクイは作業を続けた。略奪品をあらかた積み終わると、男たちはとぼとぼとヒマツ村へ戻っていった。

「“跳び蝮、が帰って来たぞ！”

村人たちが色めき立った。

「この野郎！ よくものこのこと！」

ヒマツ村のあちこちからはまだ煙が立ち上っていた。壊された建物や踏みにじられた畑などが痛々しかった。

「すまん、皆の衆……」

マハルは今にも落馬しそうなのを堪えながら、村人たちに頭を下げた。

「今更何言ってやがんだ！」

叫んだ誰かが石を投げると、村人全員がそれに倣った。

「メキラ隊長を殺しやがって！」

「うちの倅を返せ！」

「牧場をあそこまでにするのに何年かかったと思ってんだ！」

石礫の雨霰に馬が怯み、マハルは地面に振り落とされた。

「うわっ。逃げろ！」

ゴシクイとタラグモは薄情にも大将を見捨てて遁走していった。

「この野郎!! この野郎っ!!」

なおも村人たちは狂乱の形相でマハルに殴る蹴るの打擲を加え続けた。

「待って！」

そこへ割って入ったのはシヒナとナツマであった。

「みんなの憤りはわかるけど！ こんな乱暴なことをしては駄目！」

シヒナは悲痛な面持ちで叫んだ。

「マハルは必ず改心させるから！ 一生かけてでも今までの償いをさせるから！ だからお願い！」

「なんでこんな奴を庇うんだ！」

「こんな野郎、鬪り殺しにしてやればいいんだ！」

目を血走らせた村人たちの怒りは収まらない。

「頼む！」

ナツマも叫んだ。腹の底から大声を出すと、さすがの迫力に村人たちは一瞬身を竦めた。

「ここは私とシヒナに免じて怒りを静めては貰えまいか。この通りだ。頼む！」

ナツマは膝を屈して両手をついた。

「……………」

いつの頃からかヒマツ村にやって来て、瞬く間に一目置かれる存在となったナツマに土下座までされては、村人たちの気もすっかり殺がれてしまった。

「そうじゃ。暴力はいかん」

唖れた声が響いた。村の長老・カワヒリであった。

「いかにこ奴が許し難い輩であろうとも、激情に駆られるままに鬪り殺しなどしてはいかん。村の掟によって正しい裁きを行うのだ」

真っ白な髪と髭に覆われた長老の眼差しは穏やかでありながら威厳に満ちていた。

「村長（むらおさ）、ここはひとまず、こ奴の身柄をナツマたちに預けよう。その間にわしらは新たな警邏隊長を任命し、村の諸々の事柄を整え直そうではないか」

「わかりました、長老」

村長のジサキが頷いた。

「さあ、皆の衆。間もなく日が暮れる。夜は冷えるぞ。風邪などひかぬよう気を付けてのう。さあ、引き上げだ」

村長の呼びかけに応じ、村人たちが帰っていくのを見送りながら、シヒナは大きく吐息を漏らした。

「……良かった。あのまま放っておいたら危なかったわ」

「いかにも。村人たちの怒りが、あわやマハルの心の中の闇を解き放ってしまうところでした。一度修羅と化したのが最後、こんなちっぽけな村などあっさり全滅してしまいます。マハルはただの人間ではありませんからな」

「それが悪魔どもの狙いだっただけですね」

シヒナは地べたにぼろ雑巾のように転がっているマハルを見つめた。

「……………」

マハルは虚ろな表情のまま動かなかった。意識はあるはずだが、目の奥に異様な気配が見え隠れしていた。

「まずいな。マハルは心に大きな痛手を負っている。このままでは羅刹が目覚めてしまうかもしれない」

ナツマも気遣わしげに眉を曇らせた。

「マハルのことは私に任せて下さい。それよりも、イガツ、貴方は悪魔どもを」

シヒナは冷え切ったマハルの体を抱き起こしながら言った。

「承知」

短く返事をするなり、ナツマは機敏に走り出した。彦神イガツの本領を余すことなく發揮するべく、全身から気が迸り出していた。

並みの人間ではないマハルの肉体は急速に傷が癒える。骨折さえも、簡単な副木（そえぎ）だけ当てておけば数日で歩けるようになるであろう。しかし、心に受けた傷は、容易くは回復しなかった。時が経つ程に一層激しく血を流し、己自身を責め苛んだ。

——全くザマはないな、幕家のマハルよ。

自嘲と自虐の思いに蝕まれ、身も世もないほどの苦悩に見舞われていた。

ゾロメことオールドグに弄ばれた挙げ句、真っ向勝負に敢え無く敗退、子分どもにも見限られ、村人たちからは怒りと憎しみを瘴気のように浴びせかけられた。

——まあ、それはいい。どうせ自業自得だからな。

何よりも心に重くのし掛かっているのは、多くの罪もない人々を傷つけ、命を奪ったという消し去ることのできない事実である。凄まじいまでの悔恨の念が全身を締め付け、冷たい脂汗をびしょりかいて、息もできないくらいに自分で自分を責め立てる。

物心ついて以来、己の手に掛けてきた人々の顔が一つ一つ浮かんで来る。その罪の重さに押し潰されそうであった。

——取り返しのつかないことをしてしまった……！

——絶対に許されることのない重罪を犯してしまった！

——俺のような出来損ないの屑は死んでしまえ！

——馬鹿野郎！ 馬鹿野郎っ！！

地獄の業火に焼き焦がされる苦しみが永遠に続くかと思われた。彼は泣いた。彼は喚いた。ただひたすら容赦なく自分自身を裁き続けた。

——何であんな酷いことを……！

——外道め！ 犬畜生め！

——貴様如きには彼らの命を奪う資格もなければ、そんな価値もないのだ！ この大たわけが！

——死ね！ 死んじまえ！

——今すぐくたばってしまえ！

「マハル……マハル！」

夜具の上でのたうち回る彼の肩を、シヒナが揺さぶった。熱に浮かされて譫言を言っているように見えたのであろう。

——すまなかった。本当にすまなかった。

マハルは我知らずシヒナに縋り付いていた。わなわたと震えながら、汗と涙と鼻汁でぐしょぐしょになった顔を、彼女の柔らかな胸に押し当てて泣き喚き続けた。

「許してくれ……許してくれ……！」

「マハル……！」

シヒナは胸が一杯になって、ぎゅっとマハルの頭を抱き締めた。

「もうこれ以上、自分を責めないで……」

「駄目だ……俺の罪は一生消えない……償うことなんて、できっこないんだ……」

断罪の念だけが全てだった。膠着した心が、そこから抜け出すことができずに藻掻き続けるばかりであった。

シヒナは包み込むようにして、マハルの頭や背中をさすり始めた。無限の優しさを込めて、愛おしく想う気持ちだけに突き動かされて振る舞っていた。腰に巻かれた帯を解き、静かに衣服を脱ぎ捨てた。汚れなき少女の裸身を露わにしたその横顔はどこまでも穏やかで、長い睫毛の下でマハルを見つめる瞳は慈愛に満ちていた。清らかな乙女の肌で若者を抱き締めたシヒナは、そっと口づけを交わした……。

彦神イガツは、魔女ルツモを抹殺した後、魔王フハガイと壮絶な戦いを繰り広げ、相打ちとなって諸共に果てた。もはや、神の陣営には、大神ナガ、姫神シルナ、そしてマハルしか残っていなかった。

——俺は……姫神さまを……抱いてしまったのか……？

夜具に寝そべて頭上の天幕を見上げながら、マハルは動揺していた。

——とんでもないことを……。

畏れ多さに身が竦む思いがしたが、先程までの絶望的な苦悩は消え失せていた。心が澄み渡り、身体に力が漲っていた。

「そろそろ支度を」

シヒナはいつも通りの表情で声をかけた。

「ああ」

衣服と戦いのための装備を整えて立ち上がったマハルの顔は覇気に満ちていた。

「それじゃあ、行って来る」

「行ってらっしゃい」

シヒナは澄んだ眼差しで見送った。

勢いよく天幕を飛び出したマハルは、力強い跳躍で驢馬のポロに跨り、風のように疾走していった。行く先はわかっていた。「邪魔、・オールドグの放つ臭気を感じ取ることができるのだ。

とある民家に突入すると、オールドグがゾロメの姿で娘を犯していた。

「オールドグ！ 改めて勝負だ！」

マハルは何の気負いもなく叫んだ。

「こいつはお笑いだ！ またやられに来やがったか！」

オールドグは悪魔の正体を現し、一足飛びにマハルに襲い掛かった。バチバチと火花が散った。互いの毛が逆立ち、激しい衝撃が両者の間を駆け抜けた。

「ぐはっ」

弾き飛ばされたのはオールドグの方だった。

「覚悟！」

マハルは稲妻のように突進して、オールドグの体を破裂させた。

「貴様、いつの間にそんな力を!？」

背後に別の悪魔・ジグピキが現れた。マハルはすかさず衝撃波を浴びせかけた。直撃を受けたジグピキは掻き消すように消滅した。

「こっちだ！」

マハルは突如羽交い締めになされていた。魔王ジグピキの強力な把握はマハルの両腕を完全に封じてしまった。だが、マハルは慌てなかった。師であるナツマ……彦神イガツの教えがしっかりと心に焼き付いていた。

溜めに溜めた気を解き放ってぶつけると、ジグピキの両腕が千切れ跳んだ。振り向きざまにマハルは数え切れないほど両の拳の打撃を食らわせた。

「お……おお……」

ジグピキはくぐもった声を漏らすと、床の上に崩れ落ち、しゅうしゅうと溶け始めた。
「……やったぜ、師匠……」
魔王の最期を見届けてから、マハルはゆっくりと民家から出て行った。

その頃、大神ナガは、大主ガナの住む黄泉へ下っていた。進むにつれて、大神の放つ光を避けるように小鬼どもが散っていく。

「来たか、ナガ」
大主ガナが出迎えた。
「私は貴様らの暴走を止めなくてはならない」
大神ナガは重々しく言った。
「ならば戦うまでのこと」
大主ガナの目がギラリと光った。
「いざ！」

「勝ったね、マハル」
驢馬のポロに乗ろうとしていた彼に、淫魔のモルモが歩み寄った。
「潔くあんたに降伏するよ。たった今からあたしはあんたのものさ。好きなようにしておくれ」

ポロの背に跨ったマハルの太腿の辺りを、モルモはねっとりと撫で回した。
「ほんとに、あんたは惚れ惚れするくらいに好い男だねえ。あたしゃ完全にあんたの虜だよ。……抱いておくれよ。そしたら、死ぬほどイイ気持ちにしてあげるからさ」

「生憎だが、間に合ってる」
マハルは眉一つ動かさずに言った。今の彼にはモルモの漂わせる媚薬のような色香は全く通じなかった。鞍に掛けてあった剣を素早く引き抜くと、一刀両断、モルモの首を刎ねてしまった。

「ぎええええっ!？」
モルモの髪が発火し、切断された胴体と共に勢いよく燃え上がった。身の毛のよだつような断末魔を残して、黒こげになった淫魔はぼろぼろの灰になり、強い寒風に吹き散らされて消えた。あたかも夢幻の如く、悪魔どもは滅び去った。

どさりと、大主ガナの体のごつごつした岩の上に倒れ込んだ。それを見下ろす大神ナガの目は悲痛な色を湛えていた。

「何故……こんなことになったのか……？」
「全ては……貴様のせいだ……」
冷たい岩に押し付けられた顔を歪ませてガナは囁いた。口元から血が流れ出している。
「何……？」
「貴様が人間の女に惚れて、マハルが生まれた。そのせいだ」
「……………」

ナガは瞬きもせずにガナを見据えている。
「それまでは神も悪魔も七人ずつで均衡が取れていた。その均衡が、マハルの登場によって崩れ去ってしまったのだ。全ては……貴様のせいなのさ……」
「やはりそうなのか……」

大神ナガは目を閉じた。脳裏にはかつて愛した女・フユミナの面影が浮かんでいた。それは、神と悪魔を交代する前、彼が大主ガナだった頃のことである。初めて目に留めた時から強い執着が生まれ、悪魔の王の権力を振るってすぐさま彼女を我がものにした。フユミナを抱いていると、一時とは言え、心の渇きが癒された。彼にとって、またとない特別な存在であったのだ。やがてフユミナはマハルを産んだ後数年で死に、それ以来彼はずっと渇き続けているのだ。

「すまなかった……」

「ふ……いいさ」

横たわるガナは微かに笑った。

「俺も自分の役割に飽き飽きしていた。神をやっても悪魔をやってもつまらん。何の意味もない。ここいらで終わらせる、ちょうど良い潮時だろう……」

震える手で、頭の冠を取り外した。見る見るうちに髪が真っ白になり、皺だらけの老人になった。

「あばよ、兄弟……」

地底に、闇と静寂が訪れた。

荷造りをしていたマハルとシヒナの前に現れた大神ナガは、ガナと同様に年老いていた。白髪頭に冠は無く、身体も一回り小さくなったように見える。その姿に二人とも目を見張った。

「旅に出るのか……？」

嘎れた声でナガは尋ねた。

「はい。村の掟による裁きが下りて、このヒマツ村からの追放を言い渡されたのです」

マハルは丁寧な口調で答えた。

「当然の報いです。所詮、過去に己のしでかした悪行を帳消しにすることなどできないのです」

悲しげではあったが、マハルの表情には曇りがなかった。

「それにしても、シルナ……」

大神ナガはシヒナを見やった。

「貴女は最後まで姫神の力を使うことなく、マハルを見事に立ち直らせてしまわれた……全く、見事としか言いようがない」

「お褒め戴くほどのことでは……」

シヒナは小さく頭（かぶり）を振った。

「女なら誰にでもできることをやったまでのこと」

彼女は愛情溢れる眼差しでマハルを見つめた。

「それでいい」

ナガはゆっくりと頷いた。

「現人神の時代は終わる。……倅よ。これからもシヒナと共に生きていくがよい。お互いに支え合って、仕合わせに暮らせよ」

「ありがとうございます」

マハルとシヒナは深々と頭を下げた。

「では、さらば……」

老人ナガは軽く手を振ると、静かに歩き始めた。その姿が見えなくなるまで、二人はじっと見送った。

そして、荷造りを終えたマハルは、三頭の驢馬の先頭に位置するポロに跨った。差し伸べられた手につかまり、シヒナも後ろに乗った。抱き締めるようにして彼の腰に両腕を回した彼女に、マハルは微笑んだ。

「さあ、行こうか」

「ええ」

行く先は決めてなかったが、彼らの心には何の不安もなかった。二人一緒なら何とかかなる……確かなことはそれだけだった。そして、それだけで十分だった。

〈終〉